

等他にいろいろな作業の毎日でした。収容所の生活は悲惨なものでしたが毎日続きました。

毎日強制労働させながら食事は黒パン百五十グラムくらい、ご飯のときはコジラシでした。雨が降って着物が多少ぬれても着替えがないので、そのまま着なければなりませんのです。

冬になってきますと大変です。マイナス五十度から七十度くらいはあるのです。夕方おそく仕事から帰って夜寝るのですが、私の横で朝仕事に行くぞと起こしたら、戦友が冷たくなって死んでおられたことがあります。

私個人は夜昼なく当時小便に十五、六回行くので、言われ得ぬ苦勞をしました。シベリア抑留中飢えと寒さに困って、生きんがためソ連兵の個人の家に仕事に行ったときなど、残飯置き場が便所のそばにありました、拾って食べたこともあります。

また自分が食べたコウリヤンは体内で消化しませんとそのまま大便となって出るのです。それをまた拾って洗っていただいたこともあります。私がおりましたタイセツト地区ネブルスカヤ収容所の付近は、農作物はなく

松の木と白カバの木ばかりです。

冬のごく寒い五十度―七十度もあるのに、やぶれた着物、やぶれた靴、靴下一枚、冬の寒さをしのぐためボロきれを拾って靴下のかわりにしておりました。かつまた、私個人、日本のためになりませんのに、私の性分からどんな仕事に行っても人一倍働きました。その苦しい重労働で私は五十八キロから四十二キロまで体が弱っていましたが、幸い九死に一生を得て、祖国日本へ昭和二十二年十月二十七日、舞鶴港へ帰ることができました。最後に、八月八日開戦より終戦も知らず、知ったのは八月二十七日でした。私個人はその間ようやりました。八月二十七日、旧満州、横道河子が終戦でした。私の戦争体験は言うに言われぬものがあります。

私のシベリア抑留四年間

静岡県 内山 隆

私は昭和十九年四月十日、三島第九部隊に入隊直ちに

満州に渡った。着いたところは八面通であり、ここで軍隊教育を受けた。

敗戦により捕虜となりエッカに収容された。ダモイと喜ばせいつの間にかシベリア鉄道を走っているのである。日の出も反対方向から昇っているので、どこに連れていかれるのか全員が不安となっていました。

バイカル湖近くに着いたところは朝方でしたので、だれが言うともなくバイカル湖で記念に顔を洗うと言い出した。久しぶりに顔を洗ったのでさっぱりした。このころから近日中には帰れない予感がしてきましたのである。

覚悟をきめ従うままに着いたところが、寒いシベリア鉄道から北へ百五十キロのタイセット地区でした。監視された毎日であり、私たちの収容所は伐採が主な作業でした。十一月というのにテントの中で住み、自分たちで丸太の家をつくることになった。日本の大工さんなら材木に穴をあけ、柱が何本要るか、材木を整え上棟を持つのであるが、ソ連では柱が何本立ったかでノルマになるのです。ほんとに仕事はやりにくいものでした。いくら説明しても通用しないのが彼らの考え方であります。

食事（食べ物）

今思っても、それはひどい食事でした。途中一か月前に着いた人たちが話されていたが、毎日大豆をゆでたものを飯ごうのふたに三分の一の食事で、下痢している者が多く、三分の一の人たちが病院からまたは死んでいるではないかと話されていた。

この計算でいくと、あと二か月で全員が病気が死亡するではないかと言うと、心配顔をしていたのが印象的であった。お互い元気で体には注意しようではないかと誓い合い、私たちは奥へと移動した。毎日内地にいたころ、馬に食べさせるフスマをおかゆ式にしたものを一リットルくらい、野菜はパレイショが時折はいる程度であった。

みんなも作業には疲れ、食事は満足なものでなく、栄養失調で体重は減り、軍隊当時の元気な面影は全く失っていました。

食事が少ないことと悪いことはみんなの気持ちを多少動揺していったようにも思えた。

ほんとに情けないと思ったことは、大の大人が十五

夜、お節句、祭り、正月等でそれぞれの地域での料理の自慢話である。妻子の話をする人はなく、毎日食物の話だけしかない人生は、抑留者以外の人にはわからないでしょう。

与えられた食事では満足してないので、馬が食べる草なら人間も食べられると思い、または白カバダケをとってきて休憩時間も休まず飯ごうで煮て食べたり、なんとも情けない食生活であった。このため腹をこわし病院に行った者も少なくない。

三年目ころより改善されたような気がするが、「食物の恨み」は今思ってもソウとする。

四年間話し合って結論が出ていないものがある。オハギとぼたもちの違いである。こんな話を大の大人が話し合っていたとは情けないことである。これも早く内地に帰り、日本の食事を食べたかったからだと思います。

食事当番は公平な分配を行うために、全員の飯ごうを並べ、多い少ないの疑いをなくするため、見ていない者から番号を言ってもらい順番に分けたものです。従って自分の飯ごうでは食べられなかった。

思想教育

優秀な者は早くダモイするからと常にだまされていた。帰るのだと言いながら、他の収容所に少しずつ移動させ、最初に入所した者は、バラバラにされ、団体で騒動が起ころのを恐れていたと思う。

最初は中隊編成であったが、二年くらい後に、将校、下士官、兵隊の中から選挙により寮長を選び、このため中隊編成ではなく寮編成と呼ぶこととなった。

このころから生活にもなれ、教育にも熱がはいつてきたように思う。集会とか文化活動も活発で、私も寮の文化部長に推され、紙芝居をつくり、部員と他の寮を回ったこともある。

収容所から推された者が三か月くらい単位で思想教育を受け、その者が帰って来て教育を担当するシステムで、私も推されたこともあったが、私の内地での職業から実現はできなかった。

教育を受けた連中は、それは張り切っていたものです。月を増すごとに教育を受けた者は多くなっていた。

ハラシヨージャボンスキーは早くダモイするのだと、

常に言われていたので、批判することもできず、なすすべもなく、洗脳されていたものです。これも早く帰りたい一心からであった。聞いた話であるが、売店の女の人が砂糖サジ三杯をごまかしたために三年の懲役とか。公の物品をごまかしたためとのことである。スターリンの画がひげが左右違っているとのこと。画家は首とか。

あるときは、スターリンほど独裁者はいないと批判したら大変なことになったときもある。仕方なく、大衆の前で自己批判をして決着したが、一時はどうなることかと心配したものです。

いずれにしても、教育を受けながら労働しなければならぬ毎日は苦痛であった。

毎日作業

私は毎日伐採が仕事でした。最初の頃は二人引き鋸であったが、電気鋸（チェン）に変わりノルマを課せられた。

あるとき、発電機が故障して電気鋸が使用できないため、その日のノルマができず、全員宮倉だと達示があり

ました。組長であった私は、監督を接待して私一人入ることの了解を得て、組長としての責任をとったこともある。

ここで監視の兵隊の点呼の状況をお話しておきましょう。収容所の門から作業に出るとき、人員の確認がなされます。日本の場合は四列に並ぶことが常であるが、彼らは五列に並ばせるのである。最初から打ち合わせておいて、前から数えてくるときは、中ころの人間が前に出て六人となるとわからなくなつて、初めから数えなおす。次は外の者が下がるとまた前から数えなおすのである。その都度怒るけど作業に出る前の朝の時間かせぎをしたこともある。

毎日の作業は重労働で、その上栄養失調で丸太もまたげない状態でありました。冬場の作業は雪の中で、零下三十度、四十度になると立ち木も氷を切るようなものでした。倒れた木の下になり、死亡した者の葬儀もしてきただけのこともある。

冬場はフェルトの長靴で作業に出て行くのであるが、ある日私が医務室勤務のときのことです。作業に出てい

く者が、靴の先に穴があいているのを私が見て、私の靴と交換してやりました。作業に出ていく者がこのような靴であると凍傷にかかるおそれがあるからであります。ところが私はその靴をはいて収容所を回っているうち、靴の中に雪が入り私が凍傷となってしまう、今でも右足の親指に面影があります。

伐採する者と枕木を製材する者があり、貨車が入ると枕木の積み込みの使役に出されるのである。枕木を貨車に積み込む作業は厳しかった。体力は減退している中で生木の枕木を担いで積み込むときは足がぐくぐくし、大変な苦痛であったことは事実であります。恐らく健康な人でも重労働でしょう。

忘れられない強制労働

新潟県 岸野利栄

昭和十五年三月、義勇軍内原訓練所に入所、満州国勃利訓練所に転じ、昭和十八年に同訓練所を卒業しました。

た。卒業と同時に同地の勤農開拓団に配属されました。

昭和二十年五月に、平陽の輜重隊に入隊、間もなく八月九日、ソ連軍の侵攻に対し掖河で全力をあげ応戦しましたが、撤退を余儀なくし、八月十三日ついに横道河子にて武装解除を受けました。

八月十五日、大東亜戦終結の日に海林に終結、新たに編成された作業大隊に編入させられました。そして徒歩で、海林からソ満国境の綏芬河を通過し、延々と行軍、約一か月近くかかりソ領グロデコーに九月中旬ごろ着きました。グロデコーにて約一か月、軍服を脱ぎ満州国服を着せ替えられていた私どもは、ほとんど野宿の状態にて、寒気が日増しに加わる中で、行く先もわからず待機させられました。

十月も中旬ごろ、グロデコーから貨車に乗り、シベリア鉄道で西進しました。幾日もかかり、凍り始めたバイカル湖を右に見ながら、私どもはイルクーツから同州中部のタイシュエツトに着きました。ここで、私どもの輸送貨車はシベリア鉄道から外され、ニューベルスカヤというところに着きました。十二月初旬ごろだったと思いま